

テント一週一文 (む) —— 「原発設置反対小浜市民の会」 の『はとぼっぽ通信』紹介 (1):小泉純一郎講演会 +再稼働を控えた大飯原発地元からの報告

(承前)

「イチジクはどんな風にして食べるのが美味しいのですか」

「あまり甘くないようだったらジャムにしてもいいし、蜂蜜煮にする人もいるわ」

「甘い時には？」

「皮をむいてパクッと食べるのね。でも近頃のイチジクは大きいだけであまり美味しくないように思う」

「なぜ美味しくなくなったのですか」

「知らない。私の味覚が昔とは違ってきたのかもしれない。あなたさっき言ったでしょう、常識が変わるって。同じように、味覚も変わってくるのよ。常識と味覚の変わるタイムスパンは相当の開きがあるんだけど。マ、イチジクのことは置いておいて、原子力規制委員会の新規制基準って知ってる」

「内容まで詳しく知ってる」とは言えないけど……」

「私もそうなんだけど、ともかくそれに基づいて審査して、再稼働が認められているわけね。規制委員会は今年5月に大飯原発を規制適合として再稼働を認めただけど、規制委員会は適合とした事情を説明したビデオを作っていて、立地自治体のおおい町がそれを公表したのよ」

「どうしてそれを知っているんですか」

「虎の巻があるの。これよ」

「あ、「小浜市民の会」の『はとぼっぽ通信』ですか。以前この「テント一週一文(は)」で紹介したことがありますよ」

☆http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/170605kuriyama.pdf

「これは今年10月の219号なんだけど、これに、おおい町の宮崎宗真さんがそのビデオのレベルやおおい町の対応などを報告しているのよ。でね、その中に福島の実況の一端を紹介しているのよ。宮崎さんとしては、福島の方や避難されている方や詳しい方から見ると誤解を招くような表現や表記があるかもしれないと、気にしているの」

「短い文章の中にいろいろな事柄を述べたい場合には、気をつけていても、現状を詳しくフォローしている方や、直接現場を知っている方から見れば「誤解じゃないの」と指摘される記述をしたり、記述になったりすることもありますしね」

「あなたは営業の仕事だから、誤解を招くようなことはないでしょうね」

「しょっちゅうありますよ」

「しょっちゅう？」

「イヤイヤ、言葉の綾ですよ。謙虚な人がたまに間違いをしても「自分はしょっちゅう間違いばかりしてしまして……」と言うでしょう」

「私は言わないわ」

「山下さんはそうでしょうね。これは山下さん向きのテーマじゃないですね」

「私が言っているのは「たまに間違いをする」って言うところ。私は本当によく間違いをするのよ。いい加減なことを言うのよ。だから言葉の綾の「自分はしょっちゅう間違いばかりしてしまして……」はないの。心からそう言わざるを得ない場合が多いわけ、悲しいけど。それはそれとして、間違いに気付いた場合には、次の機会に訂正すれば許されるんじゃない？」

「そうですね。で、宮崎さんにはその報告を書かれた意図があるでしょう」

「もちろんあるわよ。再稼働を控えているでしょう。だから地元の人たちに福島の実情を知って欲しい、規制委員会の主張とはウラハラに健康被害は現実に起きていることを知ってもらいたい、これが目的の一つね」

「私の住んでいる福岡市は再稼働予定の玄海原発から 30 キロ以上離れているんだけど、周りでは国や当の市や町の行政はきれいごとしか発表しないとか、実態は隠蔽しているとか、マスコミは実態を知らせないとか、国不信、自治体不信、マスコミ不信が蔓延していますよ。「小浜市民の会」ばかりじゃないけど、市民運動には「実態はこうなんですよ」と、人びとに知らせるのも大きな役割の一つですものね」

「その説明のために、宮崎さんはお医者さんや議員の資料を詳しく述べているわけ。これは地元の人たちへ向けたメッセージ。あと一つはね、地元からそれ以外の地域に住んでいる人たちへのメッセージ。原発立地自治体の一つの現実を知ってもらいたいという希望ね。これが後半」

「現地の様子ってなかなか分らないですよ。だから」って言うわけじゃないけど、他の地域の人には立地自治体や住んでいる人に利権ズケ、お金ズケと批判することもあるじゃないですか。それが当たっている場合もあるけど、地元には利権やムラの体質を苦々しく思っている心ある方々もいるんですから、批判するのは簡単だけど、それを一緒に克服するのは……」

「簡単じゃないわね、短期的には。でもね、ちょっと考えてみると、日本は原発だらけでしょう。いつ近くで地震が起こるか、事故が起こるかわからない。だからね、立地自治体やそこに住んでいる人々を被害者にもしない、加害者にもしないために「あなたに電気のことを考えてもらいたい」というのが宮崎さんの言いたいことなのよ」

「山下さん、だんだん声が大きくなって張り切ってきましたね」

「私のことじゃないのよ。宮崎さんのこの記事の目的を説明していたら熱が入ってきたのよ」

「分りました」

「少し熱を冷ましてっと。この通信の表紙をチラッと読んで見て」

「エッ、小泉元首相の講演会をやったんですね」

「そうなのよ。第 1 ページはその報告。短いからすぐ読んで」

「この「哲」っていうのはどなた？ もしよろしければ」

「これは『はとぼっぽ通信』編集長の中畠哲演さん」

「ア、福岡での集会に来ていただいた折にお見かけしましたよ」

「いいから、読んでみて！」せっかちな山下さんです。

「講演会の経緯も講演の内容も効果というか、結果というか、影響というか、とにかくそれらが短い中によく書かれていますね」

「あなたの仕事の営業も、こんな風に短い時間内に商品の要点をしっかりと抑えた説明をしなければならぬのよ。してる？」と、山下さんはまだ宮崎さんの説明の熱が続いています。

「勉強になりました、中畠さん。生まれは東京じゃないですが、「おそれ入谷の鬼子母神」です」と、少し熱を冷ましてもらいながらテントでの時間は流れていきました。

(以下 次号)

(文責 栗山次郎) 2017 年 12 月 4 日公開

参照：『はとぼっぽ通信』第 219 号 1、6～8 ページ

(http://npg.boj.jp/kieyuku/week_repo/171204hato219.pdf)